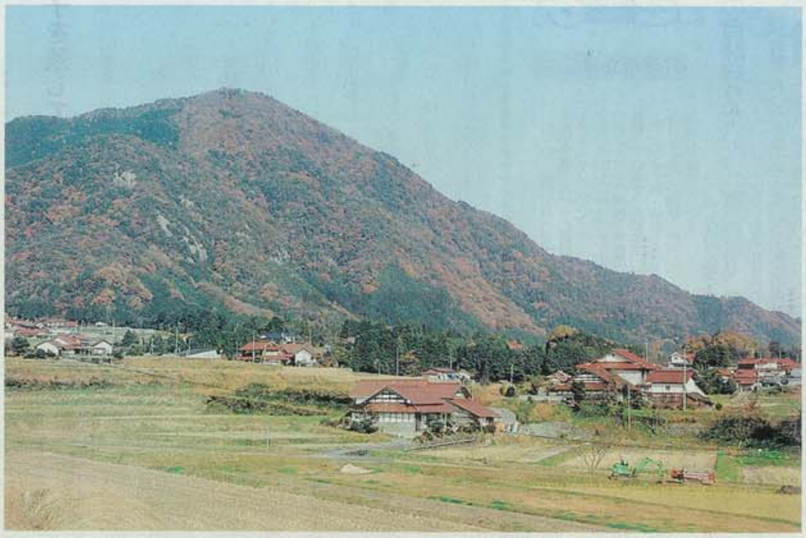
赤瓦 守るべき古里の風景

石州瓦てい談

石見活性化キャンペーン

島根県西部を中心に、県内には赤瓦（石州瓦）が連なる集落が点在し、海の青さや山の緑に映える。瓦を製造する窯業は県内の重要な地場産業であると同時に、瓦ぶきの住宅などが織りなす景観は、守るべき古里の風景でもある。瓦産業や景観の保全に縁の深い3氏に出席してもらい、産業振興策や景観保護、観光への活用策などについて話し合ってもらった。



紅葉の山を背景に赤瓦が美しいコントラストを描く街並み＝島根県邑南町矢上

てい談出席者

八田　典子氏（島根県立大学総合政策学部教授、江津市「赤瓦の映える景観まちづくり計画策定検討協議会」委員）

長岡　明生氏（しまね産業振興財団事務局長、島根県商工労働部参事）

佐々木賢一氏（石州瓦工業組合理事長）

風景の魅力

八田　近年、石見地方の赤瓦の景観は、全国的に見ても貴重で美しいものである、との評価が高まっていると思います。大学で担当するゼミでも、他県出身の学生はこの地域の瓦が赤いことに驚き、美しさに感動したと話していました。地元の学生にとっては身近な風景ですので、そんなにも珍しく貴重なものなのかと、あらためて地域の特色を見つめ直す機会となっていました。長岡さんは、赤瓦の風景の魅力について、どうお考えですか。

長岡　一つは色の調和の美しさでしょう。山の緑をバックに赤瓦が映え、その下には白いしっくいや黒い焼き杉の壁がある。さらに、海の青色も加わります。瓦だけを見ても、昔の瓦は焼き上がりによって微妙な色のばらつきがあり、見方によって表情を変えるところにもひかれますね。そして石州瓦の色は石州の粘土と来待石という地元素材が作り出します。この地域の個性だということです。

消費者に直接PR大切　長岡氏

長岡　明生氏

佐々木　私たちが子どものころ、そろった色の瓦はお金を稼ぐため県外に出し、地元で使う「まだらな瓦」は、山に捨てる「山行きの瓦」といわれていました。それを美しいとは思ってもいませんでしたが、東京の一流の設計士が、「まだらな模様が何とも言えず素晴らしい」と言われるんです。

その赤瓦の魅力は、年を取るにつれて分かるようになり、今では江津市の波子や江津本町の町並み、JR山陰線に乗って眺める山口までの風景などを本当にきれいだなと感じています。

長岡　あまり知られていないところで、江津市都野津町の町中はお薦めです。9号線より南側には趣のある建物が多くあり、入り組んだ路地を曲がる度にさまざまな瓦の風景に出合えます。私はこの町並みを自分で写真に撮って名刺にも使っています。ほかにも、江津市後地から大田市温泉津町に向かう海岸沿いの旧道も、もっと注目されていいと思っています。

八田　日本海の深い青色をバックにした赤瓦の家並みは本当に美しいですね。山あいでは邑南町矢上の景色も魅力的です。盆地の緑の中に赤瓦が点在し、高台から見下ろすと、いかにも日本の田園風景らしい、のどかさやのびやかさが感じられて、ほっとします。

景観際立つまだら模様　佐々木氏

産業の現状

佐々木　石州瓦が急速に発展したのは、1952（昭和27）年に、佐々木準三郎氏が都野津駅前でトンネル窯による生産を開始したことによるものです。その後の赤瓦をはじめとする色の開発など、先人の多大な苦労の上に現在の産業が成り立っています。

少子化や住宅不況などの要因で、出荷枚数はピーク時の3分の1に落ち込んでいますが、その中でロシアや中国など海外に輸出し新規市場の開拓に取り組んでいます。

江戸時代に北前船で北海道や新潟県の佐渡島などに瓦を運んでいた歴史があるように、われわれも先人の努力に負けてはいけないと頑張っているところです。

八田　典子氏

佐々木賢一氏

長岡　石州瓦が耐久性など品質で優れていることは、さまざまなデータから見ても明らかです。瓦はスーパーに並べて、お客さまが買いに来るという商品ではありません。設計に組み込んでもらう設計事務所やハウスメーカー、工務店への営業が主流ですが、家を建てる施主に石州瓦を指名してもらえるように、消費者に直接PRしていくことも大切になります。

島根県では、2009年度から石州瓦を使った新築やリフォームに対する助成制度を設けており、これにより県内の出荷額は制度前に比べ10%増加しました。今年の夏に千葉県に開設された石州瓦工業組合の営業拠点となる事務所の設置、運営も支援しています。

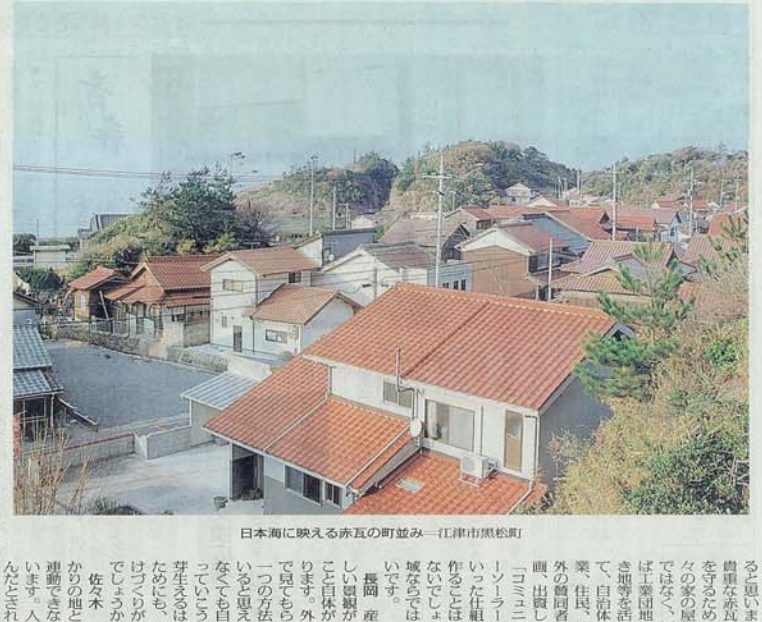
生かしたい誇れる「宝」　八田氏

景観保護

八田　貴重な地場産業である瓦産業の発展とともに、赤瓦の町並みを守り、まちづくりにどう生かしていくのかという視点も、今後の活力ある地域づくりにとって重要なポイントです。これまで以上に、赤瓦景観の魅力を地域内外に発信し、その良さを知ってもらいたいですね。

個々の家は個人のものであっても、町はみんなのもの。町の景観は住民の共同作品であるという意識をもっと強く持つことが大切ではないでしょうか。地域の景観にとって、今後、増加が予想される太陽光発電パネルの設置は、大きな課題であると思います。貴重な赤瓦景観を守るため、個々の家の屋根にではなく、例えば工業団地の空き地等を活用して、自治体、企業、住民、地域外の賛同者も参画、出資して、「コミュニティーソーラー」といった仕組みを作ることはできないでしょうか。この地域ならではの工夫がほしいです。

瓦産業振興策や景観保護、観光への活用策などについて語り合う（左から）八田典子氏、長岡明生氏、佐々木賢一氏＝浜田市竹迫町



日本海に映える赤瓦の町並み＝江津市黒松町

長岡　産地には素晴らしい景観がある、ということ自体がブランドになります。外から人を呼んで見てもらうというのも一つの方法で、見られていると思えば、ルールがなくても自然と景観を守っていこうという意識が芽生えるはずです。そのためにも、人を呼ぶ仕掛けづくりが必要ではないでしょうか。

佐々木　柿本人麻呂ゆかりの地と赤瓦の景観を連動できないかと考えています。人麻呂が歌を詠んだとされる江津の大崎鼻や高角山などは全国有数の景色が広がり、そこには赤瓦がある。市民が地元資源の素晴らしさに気が付くきっかけにもなると思います。県の古事記1300年事業も展開中で、人麻呂を切り口とした情報発信に期待しています。

八田　私も江津のボランティアガイドの方から、全国から訪れた万葉ファンの皆さんが、人麻呂の歌に詠まれた風景がそのまま残っていると感銘されるとの話を聞きました。石見の歴史的景観を大切にしていきたいですね。

長岡　2013年には出雲大社の大遷宮も控えており、観光客にぜひ石見まで足を延ばしてもらい、赤瓦の景観を見てもらいたいですね。

八田　全国各地で盛んに行われている地域おこしで大切なのは、活動の核となる、その地域ならではの個性、魅力だと思います。石見地域には、赤瓦の屋根景観をはじめ、それがあると自信を持って言えます。誇れる宝があることを自覚し、よりよい地域づくりに生かしていければと強く感じています。